

『エッセー』に於ける語の配列

海 堀 勲

『エッセー』に於ける語の配列の問題に関しては無論十六世紀後半のシンタックス部門に於いて取り扱うべきものである。だが言わばそうした文法的な要因は一般には語順の許容範囲を設定する形式化したものに過ぎない。実際には作家個人の要因が配列を決定することが多い。個人的な要因に着眼すると、モンテーニュの文体が如何に独創的であるかが判明する。ヴィレなどの指摘する様に、それは確かに短期間で完成されたのでは決してない。膨大な資料を検討するまでもなく、彼の文体の特徴からその点は明らかである。何故なら心底から単調さを避け意味深長を狙った暗示的な特色が随所に表われているからであり、又個人的趣向から修辞上の効果を追求すべく並々ならぬ努力が重ねられた形跡が窺えるからである。そしてそれらの要素が語の配列を決定づけ又変化させているのである。『エッセー』はその一字一句まで凝視せねばならず、そうすることによって語や表現の裏に隠された意識的なパズルを解明せねばならないのである。

語の配列は作品の内容に則した語彙の選定と語間の相関関係によってなされる。『エッセー』の様にそこに修辞上の効果が影響を及ぼすと語彙の設定に於いて語の価値と音の問題が極めて重要な要因となる訳である。本稿ではそうした修辞上の要因が語の配列に及ぼす影響と効果の実態を幾つかの項目に分類して観察していきたい。

目 次

- I 音の反復法
- II 語呂合わせ

- III テンポ
- IV 並置法
- V 反復表現法
- VI 結び

I. 音の反復法

(1) 疊韻法 (allitération)

ある音に比較的強い価値を与えることにより減速効果をもたらす手法の一つである。連続する例を除いては意識的なものかどうか判別できないところが難点である。『エッセー』の場合この手法は多用されているがそうした事実は文体の気取りのなさを証明していると言えよう。当然その相当箇所にアクセントが移行し、音楽性と同時に絵画的性が意味に先行している。モンテーニュに於いて疊韻法は他の技法とは異なり単なる遊戯でしかなく特別な感情から来るニュアンスは存立しないように思われる。音の遊戯に大袈裟な原因は追求されるべきではなからう。モンテーニュの陽気さとパロディーに他ならないのであろう。又、この手法は一種の誇張法であり、読者との対話を重視するモンテーニュの口を通じて語られる口語が声音となって我々の耳に反響しているかのようである。彼自身そうした効果を意識していたのかも知れない。『エッセー』中最も頻繁なのは歯擦音〔s〕である。代名動詞が連続すると容易に構成される : *L'ignorance qui se sçait, qui se iuge et qui se condamne, ce n'est pas vne entiere ignorance.*⁽¹⁾ そもそも音とは表現上の効果を生ずるものである。又音の反復とは形式と内容との間に密接な関係を設立する為に特有な響きを作り出すものである。前例中、再帰代名詞 *se* と *ignorance* の *-ce* の同音効果がさらに指示代名詞によって倍化されていると言える。しかし文法語にさほど依存しない場合には苦心の跡が窺える : *la salive d'un chetif mastin versée sur la main de Socrates secouer toute sa sagesse et toutes ses grandes et si réglées*

imaginations.⁽⁶⁾ 全24語のうち11語中に〔s〕が組み入れられてある。〔s〕のない語は前置詞、冠詞などの文法語が多い点からもこの構成の密度の高さは評価される。しかし次の様な飽くなき追求によって極端な例が生じる：à sa seule science de ses richesses.⁽⁶⁾ à ceux qui sont sous son empire⁽⁶⁾ Si ce disciple se rencontre de si diverse condition,⁽⁶⁾ 二番目に頻繁なのは流音 l である：qui est l'eslite entre le bien et le mal, veu que nul mal ne le touche?⁽⁶⁾ javelines sur lesquelles les autres le lancent.⁽⁷⁾ 定冠詞と補語人称代名詞の語頭音 l によってやはり当然容易に構成される。次例は三拍子の各節中に程良く分配されたリズムが流音 l によって流動性と軽快さを表現している。内容が結石に関するだけに一層象徴的である：qui n'a du mal que lors qu'il l'a la ou l'autre a souuent la pierre en l'ame auant qu'il l'ait aux reins.⁽⁶⁾ 7つの流子音 r は次例ではすべての実語に組み入れられてあり稀少で価値ある構造を持つ。6つの流子音 l が r の流動性を助長し理想的な音響効果を実現させている：Le reste de la France prend pour regle la regle de la court.⁽⁶⁾ m の例としては：Je m'ennuie que mes essais servent les dames de meuble commun seulement, et de meuble de sale.⁽⁶⁾ 破裂音 t の例は比較的少数である：Trouves tu que tu sois trop à ton aise, si ton aise ne te vient à desplaisir?⁽⁶⁾ しかし疊韻法による同一音のハーモニーが語群の意味作用に明らかに支障をきたす場合は語彙が取り替えられる：ce n'est principalement que ramener à moy mes affections et mes pensées, restreindre et resserrer non mes pas, mais mes desirs.⁽⁶⁾ pas を挟んだ mes-mais-mes の連続に意味の不明瞭さを感じ取ったものと思われ、この mais は市版本では ains と変えられる。逆に Si c'estoit à moy à me dresser à ma mode⁽⁶⁾ では mode は88年版では poste だった。m の疊韻法による変更であろう。次例中の破裂音 p の連続は遊戯以外の何物でもなく意味構造上の価値は失われている：pour la plus part, plus besoning de plomb⁽⁶⁾ 逆に次の変更は p の疊韻法の採用によるものであり、少なくとも (b)→(c) の変更が意識的であることは明白である：(a)il ne prenoit nul

goust. ⇒(b)il *p*renoit *p*eu de goust. ⇒(c)il *p*renoit *p*eu de *p*laisir.⁶³ 次例中の *vaines et foibles* は(c)では *foibles et folles* と変更され、軽妙な無声子音 *f* の連続となる : il leur est souvent *f*orce de *f*orger des *f*onctions *vaines et foibles*.⁶⁴

(2)半諧音 (assonance)

主として語間の類似性と反意性を基礎にして何らかの関連性を暗示する技法であり、モンテーニュはこれを多岐にわたって駆使している。言うまでもなく半諧音は語末部分に於ける音の一致であり次の語や表現へと思考を敷衍させるのに有利である。homophones の語尾音の反復が音と意味を先送りしそこに一つの連鎖が形成される訳である : un domestique apotiquaire de feu mon pere. (下線部は(c)での加筆)⁶⁵ si *f*lotante et vagabonde (下線部は(b)では *volage*)⁶⁶ 次例は鼻母音 (ε) の連続である : je n'ay *f*aim de rien, mais je crains (下線部は(b)では *fuis*)⁶⁷ モンテーニュの収集趣味は次の -té の連続から窺えよう : par la *rareté* ou *nouuelleté*, ou encore par la *difficulté*, si la *bonté* et *utilité* n'y sont *ioinctes*.⁶⁸ 又、異種二対の遊戯も頻繁である : j'associe le *plaisant*, non le *prudent* : au *lict*, la *beauté* avant la *bonté*.⁶⁹ les *humeurs faciles* ou *difficiles* estre un grand prejudice à la *bonté* ou *mauvaistié* de l'ame⁷⁰ 次例中の同一形容詞の反復、それぞれ二対の名詞と動詞の間の調和はまさに詩句であり、散文としては絵画性を超越したまつまり過ぎの感さえある : L'extreme *froideur* et l'extreme *chaleur* cuisent et rotissent.⁷¹ しかしこの半諧音もやはり文意との間に違和を生じることがあり、モンテーニュは特にそれを鼻母音の音楽性に於いて感じ取っているようである : une *fame pensant* auoir *aualé* un'esplingue quant et quant son *pain* (下線部は(c)では *avec* と訂正される)⁷² de cent ans qui *n'ont* non plus de *proportion* (下線部はそれぞれ d'un siècle, a と変更され、連続する鼻母音と *n'ont-non* の同一音を避けている)⁷³ しかし次の様な、鼻母音の反復による音の遊戯の為にのみ存立しうる例を容認している : on *ayme* un *corps sans ame* ou *sans sentiment*

quand on ayme un corps sans son consentement et sans son désir.⁶³⁾ 前例中21語のうち有効な実語は5つの名詞のみである。こうした文法語の多い形式は最上の修辞上の場と言える。ところで次例は意識的なものかどうか判明しない：Ils vont, ils viennent, ils trottent, ils dansent ; de mort *nulles nouvelles*.⁶⁴⁾ 語頭の nu-, nou- の類似と語尾音の同一とによりこの二語の関係は明らかである。モンテーニュは通常(c)に於いて nul を aucun に訂正するがこの場合していないのはそうした理由によるものと思われる。だが du jugement et de la vertu, nulles nouvelles⁶⁵⁾ では(c)に於いて下線部は peu de と改められる。同一表現を繰り返す単調さを嫌う細心な配慮によるものなのだろうか。さらに同音性と反意性の交錯した次の形式では注目すべき思想上の根幹が語られている：car nous sommes sur la *maniere*, non sur la *matiere* du dire.⁶⁶⁾

(3)語末同音 (homéotéleute)

半諧音よりも語末に於ける同音性が完全な場合であり効果もそれだけ大きいと言える。Les accessions externes prennent saveur et couleur de l'interne constitution. (下線部は(b)では goust)⁶⁷⁾ Chacun fruit à le voir naistre, chacun suit à la voir mourir (下線部はそれぞれ(b)では desdaigne, court)⁶⁸⁾ non vrayes seulement, mais comment que ce soit ou *feintes* ou *peintes*.⁶⁹⁾ この技法は語の配列に影響を及ぼすのみならずそれを決定づけることがある：Bon est il tousjours *et utile* de les ouyr⁷⁰⁾ 前文との脈絡上の理由以外には、[etil], [eytil] の類似音による倒置と考えていいたろう。次の倒置の必然性は同音性以外には考えられない：Et dict on du ieune Caton que⁷¹⁾

詩に於ける脚韻 (rime) は語末同音の特別な場合である。モンテーニュは詩に造詣が深いので押韻と表現してもよからう。彼の場合、不完全押韻は意識的なもの以外をも含めるとその数は夥しいのでここでは扱わずにおく。一方完全押韻は形態上豊富ではあるが安易な脚韻も多い。例えば接尾辞、接頭辞、派生語、動詞活用形などによるものはその安易な形式の一つである。だが詩とは一味違うそうしたぎこちなさ、平凡さ、通俗性こそが『エセー』の詩的散文の魅

力なのであろう。不思議にもそうした脚韻の連続に読者の目は慣れ切ってしまう何ら不自然ではなくなり、延いてはその連続がユーモアに感じられてくるのである。接尾辞 *-ment* の単なる遊戯は頻繁である：Tout homme peut dire *veritablement* : mais dire *ordonnéement*, *prudemment* et *suffisamment*, peu d'hommes le peuvent.⁶³ 次の構成は接頭辞によるものである：C'est ma *meta-phisique*, c'est ma *phisique*.⁶³ L'insuffisance et la sottise est *loüable* en une action *meslouable*.⁶³ L'*heur* et le *malheur*.⁶³ Si *prendre* des livres, estoit les *apprendre*.⁶³ 次例は文尾に於ける見事な押韻である：l'ame retire au dedans et amuse les puissances des *sens*.⁶⁴ (下線部は(a)(b)では operations)

(4)音節重複 (redoublement de syllabes)

この詩的技巧はモンテーニュの時代にはまだ比較的流行していた。完全な重複構成であるだけに多くの場合コミックな要素がある点は否定できない：pour le *sçavoir avoir* usé d'ustensiles d'or et d'argent⁶⁴ *soubs couleur de leur prescher*⁶⁴ Les *Scythes* où la *nécessité* les *pressoit* en la *guerre*⁶³ non un *passage d'aage* en autre⁶⁴ on leur *commet*, *comme* fait un *charpentier*⁶³ pourveu que ce fust *sans sentiment*!⁶⁴ nous *sçaurons* bien pour ce *coup couvrir* nostre *jeu*⁶⁴ 音節重複は『エセー』では稀である。モンテーニュが一語の中でこの重複を行うことを嫌うのは彼が文全体の均衡を重要視する作家であるからだろう。又多くの場合それが不快感を伴う所為でもあると思われる。

II. 語呂合わせ (calembours)

既述の用例の幾つかは語呂合わせの形になっている。一目瞭然の技法なのでここでは各グループごとに例を掲げるだけにとどめよう。

(1)音節の数が等しいもの：Il ne s'est point souvenu de dire, ou *faire*, ou *taire* cela, pour l'amour de moy⁶³ vous estes à maudire ou l'*heur* de leur *memoire*⁶³ Ces exemples *estrangers* ne sont pas *estranges*⁶³ et non seule-

ment ne l'emprisonna ou empoisonna.⁽⁶¹⁾ Leur sens et *entandement* est *entierement* estouffé en leur passion.⁽⁶²⁾

(2)音節の数が異なるもの : de façon plus *equitable* et plus *equable*.⁽⁶³⁾ toutes intentions legitimes et *equitables* sont d'elles mesmes *equables* et temperées, (下線部は(c)の加筆部分)⁽⁶⁴⁾ *Offrons* y nos *offrandes* et nos vœus⁽⁶⁵⁾ mais chaque *cité* a sa *civilité* particuliere⁽⁶⁶⁾ *L'equalité* est la premiere piece de *l'equité*⁽⁶⁷⁾ comme par *compensation* et *composition*.⁽⁶⁸⁾

(3)派生

派生語による語呂合わせは一種のペリフレーズを形成する。以下のグループのうち、名詞と動詞の構成の場合それは容易に行われる。

(イ)名詞と動詞 : Il a *joué* son *jeu*. (下線部は(a)(b)では *rolle*)⁽⁶⁹⁾ Et le *jeu* de la constance se *joue* principalement⁽⁷⁰⁾ et se *meuvent* nos humeurs avecques les *mouuemens* du temps.⁽⁷¹⁾ *Mourir* de vieillesse, c'est vne *mort* rare, singuliere et extraordinaire⁽⁷²⁾ Le monde n'est qu'une *branloire* perenne. Toutes choses y *branlent* sans cesse : la terre, les rochers du Caucase, les Pyramides d'Ægypt, et du *branle* public et du leur⁽⁷³⁾ j'entrepris seulement de me *branler*, pendant que le *branle* me plaist.⁽⁷⁴⁾ le *plaignoit* d'une *plainte* commune.⁽⁷⁵⁾ Qui auroit à *faire* son *faict*⁽⁷⁶⁾ La veue des *angoisses* d'autruy m'*angoisse* materiellement.⁽⁷⁷⁾ Iniques *juges* qui remettent à *juger* alors qu'ils n'ont plus de cognoissance de cause.⁽⁷⁸⁾

(ロ)名詞と形容詞 : Combien ay-je veu de condemnation, plus *crimineuses* que le *crime*?⁽⁷⁹⁾ De toutes les choses *admirables* a surmonté *l'admiration*.⁽⁸⁰⁾ Je haï~le *sage* qui n'est pas *sage* pour soy mesmes⁽⁸¹⁾ Les Ægyptiens, d'une *imprudente* *prudence*.⁽⁸²⁾ un *medecin* plus mal *medeciné*.⁽⁸³⁾

(ハ)名詞と副詞 : la *divinité* nous en a si *divinement* exprimé⁽⁸⁴⁾

(ニ)形容詞と動詞 : Un parler *ouvert* *ouvre* un autre parler.⁽⁸⁵⁾

(ホ)名詞 : et celle d'un *païsan* de mon *païs*⁽⁸⁶⁾

(へ)動詞 : *Qu'il sçache qu'il sçait, au moins.⁽⁶⁷⁾ Veut-elle tousjours ce que nous voudrions qu'elle voulsist ?⁽⁶⁸⁾*

Ⅲ. テンポ

一般に『エセー』の緩やかなテンポは、語彙が形態的にも意味的にも重厚であることに起因している。単文が意味深長な格言調であり、複文と総合文が多様な組み合わせを持つことによって文の進行は更に遅くなり場合によっては逆戻りすることがある。モンテーニュに関して言えば、複文と総合文は修辞技法によってテンポを加速させたり減速させたりしている。修辞技法の一つであるキアスムはテンポに大きな影響を与える組み合わせと言える。モンテーニュの場合キアスムはほぼ減速効果をもたらしている。*Voilà le lyon hoste de l'homme! voilà l'homme medecin de lyon!⁽⁶⁹⁾* この例では読者の目は最初の文へと逆戻りする。従ってテンポは減速される訳である。次例の様な人称代名詞や不定代名詞を使用した4拍子構成は『エセー』では頻繁である：*Si vous le voyez, vous l'oyez ; si vous l'oyez, vous le voyez.⁽⁶⁰⁾* この例と同様明確な機能をもつキアスムの例を幾つか引用しよう：*de mesme chose, ils disent gris tantost, tantost jaune⁽⁶¹⁾ la peur extreme et l'extreme ardeur de courage⁽⁶²⁾* (キアスムが付加形容詞の語順に影響を及ぼしている) 次例は反意語のキアスムである：*Les Pythagoriens font le bien certain et finy, le mal infiny et incertain⁽⁶³⁾* この技法が次例では補語人称代名詞の語順を決定づけている：*le batement de la mer le vous estreint et vous le serre.⁽⁶⁴⁾* この様にキアスムは一種の反復効果の原因ともなりうる訳なのである。そしてテンポの減速により思想や論理の展開に於ける左右対称が強調されるに至るのである。

逆にモンテーニュはテンポを加速させる手法として語や文の並置法を用いているがこれに関しては次章にて後述する。語彙の選択という面では文法語をその筆頭に挙げることができよう。空虚な語に過ぎない文法語を連続させて意味

をなす一群を形成しそれらを対照させる十六世紀的な手法である：et ce qui n'est pas, que ce qui est ; et qu'ils ne croient pas, que ce qu'ils croient.⁶⁹ 文字表記が示す様に21語が用いられているとは感じられない程文のテンポは速い。他方次例では14語しか用いられていないが進行は減速される：Non seulement plusieurs sectes, mais plusieurs peuples, maudissent leur naissance et benissent leur mort.⁶⁹ この例の実語の数と長綴の連続に読者は疲労してしまう。

この様にモンテーニュは文のテンポに様々な緩急を設定しそれらを殆んど交互に配列させている。その結果長い文は幾つかのまとまりある単位から構成されているのでさほど読者を消耗させることもないし、又短い文は既述の如く展開された表現を要約するといった格言的な性質を持つので切々の非論理的な印象はさほど認められない。

IV. 並置法

モンテーニュは名詞、形容詞、動詞、副詞それに節を並置することによりテンポを加速させるなど大いに効果を引き出している。この並置法も詩的技法の一つである。

(1)名詞：La science, la force, la bonté, la beauté, la richesse, toutes autres qualitez.⁶⁹ はすべて女性名詞であり, elles embrassent l'enfance, l'adolescence, la virilité et la vieillesse du monde.⁶⁹ はすべて女性名詞であるだけでなく l' と la とに分けて並置されている。モンテーニュにはさらに男性名詞と女性名詞を分けて並置する傾向が著しい：en tel lieu, tel iour, en telle compagnie et de telle façon.⁶⁹ 次例は半諧音によって分けられた並置である：Les marchands, les juges de villages, les artisans⁶⁹ 彼はとりわけ名詞の並置には細心の配慮を払っている：La curiosité, le sçauoir, la subtilité の配列を(c)では男性名詞を最後に移し -té の女性名詞を連続させることによる効果を狙って

いる。一方同義語の並置による遊戯は特に(c)ではかなり制限されている：*et se rengea à l'usage et à la coustume* (下線部は(a)(b)の時期の部分であり(c)では削除される)⁶⁰⁾ 又 *reverence et respect*⁶¹⁾ の下線部は(a)(b)のもので(c)では削除される。

(2)形容詞；*Est-il rien certain, resolu, desdaigneux, contemplatif, grave, serieux comme l'asne?*⁶²⁾ モンテーニュは形容詞の価値を最もよく心得た作家のひとりである。形容詞の特徴を生かそうとすれば当然文中の他の構成要素の価値を抑制せねばならない。かくして上例の様に形容詞以外の部分に空虚な文法語を使用する必然性が生じる訳である。しかしこうした形容詞の連続はその重圧感から次第に姿を消し(c)ではかなりの数が削除される。とは言え、次の様な整然とした配列は残されている：*s'espandant par nombres de musique à sa circonference, divin, tres-heureux, tres-grand, tres-sage, eternal.*⁶³⁾ モンテーニュには前置付加形容詞を連続させる傾向が著しい：*le plus grand et plus noble principal de France*⁶⁴⁾ 下線部は(c)では削除される。おそらく頭部肥大に対する配慮からだと思われる。が、一般的に彼は形容詞 *noble* を次第に嫌う傾向にあり特に(c)に於いてはそうである。そうしたことも原因の一つだろう。逆に *d'une moyenne intelligence* ⇒ *d'une puerile et apprantisse intelligence*⁶⁵⁾ の様な変更も見られ頭部肥大を復活させている。一般に付加形容詞の多用や連続は文体上効果的とは言えない。あまりに直接的な構成により読者の注意力が論理的に作用しにくいからである。モンテーニュが意識的に形容詞を並置するのはやはり詩を意識しているからであろう。例えば抽象名詞 *mal* 以外の実語要素がすべて形容詞である次の構文は見事な対称を形成している：*le plus vieil et mieux cogneu mal est tousjours plus supportable que le mal recent et inexperimenté.*⁶⁶⁾

(3)副詞 (-ment)

既述の如くモンテーニュの思想の均衡は語の長短のバランスから出発している。文中に於いて語のバランスを保つ上で最も有利な方法は副詞の使用であ

る。彼自身(c)に於いては名詞と形容詞の構成よりも動詞と副詞の構成に依存しており副詞の重要性を再認識していると言える。Je n'ay rien à dire de moy, *entièrement, simplement et solidement, sans confusion et sans meslange.*⁶⁸ だが場合によっては、-ment の副詞の反復にはその音声上と語形上の荘厳さによる違和感が生じることがある。『エセー』全体に於いてこの -ment の副詞の使用には明らかに躊躇が感じ取れる：Et m'offre maigrement et fierement à ceux à qui je suis.⁶⁹ (下線部は(b)では削除され(c)で復活されている)

(4)動詞：La maniere de naistre, d'engendrer, nourrir, agir, mouvoir, viure et mourir des bestes⁷⁰ のような連続並置は頻繁であるが顕著な特徴は見い出せなかった。唯、動詞の並置は当然不定詞が多くその大部分は次例の様に名詞化したものである。次例は動詞のみならず副詞と形容詞をも並置させた典型的な構成である：Tancer, rire, vendre, payer, aymer, hayr, et converser avec les siens et avec soymesme doucement et justement, ne relacher point, ne se desmentir point, c'est chose plus rare, plus difficile et moins remarquables.⁷¹

(5)節

一般的に当然二拍子と三拍子が大部分を占める。次例は否定辞 ne~rien でまとめられた三拍子構成である：Qui suit un autre, il ne suit rien. Il ne trouve rien, voire il ne cherche rien.⁷² この様に ne~pas, que, point, rien, personne, nul(aucun), jamais plus などの否定辞は on, ils, nous, je, il(faut) などの主語と共に用いられ、一般化された文中に見られる。そこでは当然並置節が様々な組み合わせを展開している。だが時折見事な並置構成を主として(c)の段階で崩すことがある：Il palit a la peur ; il rougit a la honte ; il gemit a la colique.⁷³ (下線部は se pleint à l'estrette d'une verte と変更されるがおそらく終生 colique という名詞に悩まされ続けた作者は並置法の遊戯を故意に避けたかったのだろう)

V. 反復表現法

モンテーニュの文体の価値のひとつとしてさらに反復法を挙げるができる。表現の反復とは多くの場合実語の反復であり従って思想の反復へと高められていく訳である。だから当然同格が増加し、又代名詞や代動詞を故意に避ける手法も自然と多様化していくのである。唯、関係節などの連続が文意にある程度の重圧感を及ぼしている点は否定できない。総じて次に掲げる用例中の各分子の反復法がモンテーニュに特有の、思想の明確化に寄与している事実は認めざるを得ない：car le *mal* y guerit le *mal*.⁰⁰⁰ le *hasard* puisse tant sur nous, puisque nous viuons par *hasard*.⁰⁰⁰ Si je parle *diversement* de moy, c'est que je me regarde *diversement*.⁰⁰⁰ car je *songe* volontiers que je *songe*.⁰⁰⁰ J'*honore* le plus ceux que j'*honore* le moins.⁰⁰⁰ Les *biens* mondains ne sont pas *biens* à Dieu ; ce ne sont donc pas *biens* à nous⁰⁰⁰ Un personnage *sçavant* n'est pas *sçavant* par tout ; mais le *suffisant* est par tout *suffisant*.⁰¹⁰ Et *me promeine* pour *me proumener*. Ceux qui *courent* un benefice ou un lievre ne *courent* pas ; ceux là *courent* qui *courent* aux barres, et pour exercer leur *course*.⁰¹⁰

VI. 結 び

以上観察してきた様に、少くとも語の配列に関する限りモンテーニュの言う無頓着さは感じられない。それどころか配列の修正に於けるその想像力とエネルギーには計り知れないものが秘んでいる。それは特に(c)に於いて著しい。筆の赴くままに書いた風を装っているが実は非常に巧妙な見せかけなのである。『エッセー』は短期間で書かれたのではない、と既に述べたが、更に言えばこの作品は極めて周到に準備された芸術性が裏面に盛り込まれてあるという複雑な

性格を持っているのである。だから思想の論拠に合致した筆致で表現しているとは必ずしも言えないのである。何故なら『エッセー』全体に於いて又特に(c)に於いて修辞上の理由だけで加筆、訂正、削除をしている場合も多いからである。その為、語の配列が変化しそれが思想の一部を変更してしまうのである。さらに音の効果の飽くなき追求は乱用でさえある。音声上のあるまじりによって思想を包み隠そうとする意図があったかどうかは判明しないが結果的にはそうした構造となっている。換言すれば『エッセー』に於いて音と意味は統合していると言うより寧ろ対立していることさえある訳である。思想が文体的技巧によって抑制されているのである。だから思想の展開だけでなく、詩的文体をも試す(essayer)為に Essais という場を設定したような気がしてならない。そう考えるなら『エッセー』はまさしくそうした二面性を持つ作品だと言えよう。

〈略語表〉

- Dezeimeris⇒下記の1580年版
- Villey⇒下記のボルドー市版
- (a)⇒1580年版のテキスト
- (b)⇒1588年版の加筆部分
- (c)⇒それ以後の加筆部分

〈使用テキスト〉

- Essais de Michel de Montaigne, texte original de 1580 avec les variantes des éditions de 1582 et 1587, publié par R. DEZEIMERIS & BARCKHAUSEN. Essais. Reproduction en fac-similé de l'exemplaire de Bordeaux 1588, annoté de la main de Montaigne, vol. 1~3, Genève-Paris, 1987.
- Les Essais de Montaigne, édition conforme au texte de l'exemplaire de Bordeaux, par P. Villey, Paris, 1965.

〈参考書目〉

- Dubois J. ; Rhétorique générale, Paris, 1970.
- Gray F. ; Le style de Montaigne, Paris, 1969.
- Huguet E. ; Dictionnaire de la langue française du XVIe siècle, Paris.
- Voizard E. ; Etude sur la langue de Montaigne, Paris, 1969.

註

- | | | | |
|-----------------------------|-----------------------------|--------------------------------|-----------------------------|
| (1) Villey p. 93 | (2) <i>ibid.</i> , p. 129 | (3) <i>ibid.</i> , p. 621 | (4) <i>ibid.</i> , p. 289 |
| (5) <i>ibid.</i> , p. 162 | (6) <i>ibid.</i> , p. 499 | (7) <i>ibid.</i> , p. 521 | (8) <i>ibid.</i> , p. 80 |
| (9) <i>ibid.</i> , p. 269 | (10) <i>ibid.</i> , p. 847 | (11) <i>ibid.</i> , p. 879 | (12) <i>ibid.</i> , p. 823 |
| (13) <i>ibid.</i> , p. 819 | (14) <i>ibid.</i> , p. 822 | (15) <i>ibid.</i> , p. 391 | (16) <i>ibid.</i> , p. 512 |
| (17) <i>ibid.</i> , p. 103 | (18) <i>ibid.</i> , p. 624 | (19) <i>ibid.</i> , p. 847 | (20) <i>ibid.</i> , p. 261 |
| (21) <i>ibid.</i> , p. 192 | (22) <i>ibid.</i> , p. 845 | (23) <i>ibid.</i> , p. 261 | (24) <i>ibid.</i> , p. 70 |
| (25) <i>ibid.</i> , p. 128 | (26) <i>ibid.</i> , p. 882 | (27) <i>ibid.</i> , p. 58 | (28) <i>ibid.</i> , p. 93 |
| (29) <i>ibid.</i> , p. 928 | (30) <i>ibid.</i> , p. 67 | (31) <i>ibid.</i> , p. 878 | (32) <i>ibid.</i> , p. 430 |
| (33) <i>ibid.</i> , p. 931 | (34) <i>ibid.</i> , p. 249 | (35) <i>ibid.</i> , p. 928 | (36) <i>ibid.</i> , p. 1072 |
| (37) <i>ibid.</i> , p. 891 | (38) <i>ibid.</i> , p. 934 | (39) <i>ibid.</i> , p. 385 | (40) <i>ibid.</i> , p. 596 |
| (41) <i>ibid.</i> , p. 243 | (42) <i>ibid.</i> , p. 129 | (43) <i>ibid.</i> , p. 293 | (44) <i>ibid.</i> , p. 805 |
| (45) <i>ibid.</i> , p. 138 | (46) <i>ibid.</i> , p. 351 | (47) <i>ibid.</i> , p. 625 | (48) <i>ibid.</i> , p. 34 |
| (49) <i>ibid.</i> , p. 37 | (50) <i>ibid.</i> , p. 109 | (51) <i>ibid.</i> , p. 993 | (52) <i>ibid.</i> , p. 1013 |
| (53) <i>ibid.</i> , p. 188 | (54) <i>ibid.</i> , p. 792 | (55) <i>ibid.</i> , p. 303 | (56) <i>ibid.</i> , p. 48 |
| (57) <i>ibid.</i> , p. 94 | (58) <i>ibid.</i> , p. 319 | (59) <i>ibid.</i> , p. 64 | (60) <i>ibid.</i> , p. 45 |
| (61) <i>ibid.</i> , p. 275 | (62) <i>ibid.</i> , p. 270 | (63) <i>ibid.</i> , p. 805 | (64) <i>ibid.</i> , p. 977 |
| (65) <i>ibid.</i> , p. 12 | (66) <i>ibid.</i> , p. 15 | (67) <i>ibid.</i> , p. 97 | (68) <i>ibid.</i> , p. 31 |
| (69) <i>ibid.</i> , p. 1071 | (70) <i>ibid.</i> , p. 530 | (71) Dezeimeris p. 95 | (72) Villey p. 517 |
| (73) <i>ibid.</i> , p. 141 | (74) <i>ibid.</i> , p. 945 | (75) <i>ibid.</i> , p. 794 | (76) <i>ibid.</i> , p. 226 |
| (77) <i>ibid.</i> , p. 151 | (78) <i>ibid.</i> , p. 103 | (79) <i>ibid.</i> , p. 65 | (80) <i>ibid.</i> , p. 167 |
| (81) <i>ibid.</i> , p. 36 | (82) <i>ibid.</i> , p. 261 | (83) <i>ibid.</i> , p. 37 | (84) <i>ibid.</i> , p. 69 |
| (85) <i>ibid.</i> , p. 505 | (86) <i>ibid.</i> , p. 879 | (87) <i>ibid.</i> , p. 850~851 | (88) <i>ibid.</i> , p. 64 |
| (89) <i>ibid.</i> , p. 85 | (90) <i>ibid.</i> , p. 647 | (91) <i>ibid.</i> , p. 175 | (92) <i>ibid.</i> , p. 8 |
| (93) <i>ibid.</i> , p. 938 | (94) <i>ibid.</i> , p. 572 | (95) <i>ibid.</i> , p. 176 | (96) <i>ibid.</i> , p. 410 |
| (97) <i>ibid.</i> , p. 959 | (98) <i>ibid.</i> , p. 335 | (99) <i>ibid.</i> , p. 253 | (100) <i>ibid.</i> , p. 54 |
| (101) <i>ibid.</i> , p. 809 | (102) <i>ibid.</i> , p. 151 | (103) <i>ibid.</i> , p. 283 | (104) <i>ibid.</i> , p. 166 |
| (105) <i>ibid.</i> , p. 278 | (106) <i>ibid.</i> , p. 335 | (107) <i>ibid.</i> , p. 651 | (108) <i>ibid.</i> , p. 253 |
| (109) <i>ibid.</i> , p. 531 | (110) <i>ibid.</i> , p. 806 | (111) <i>ibid.</i> , p. 977 | |

(大阪商業大学商経学部助教授)